

本讀庭家教正

(9)
至聖生神女
マリヤの略傳

枚七繪挿

版三第年五正大

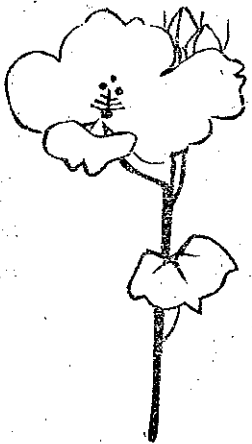


女 神 生 聖 至

にも動もすれば疲れ果てんとす、夫の心靈に於ての生命か滅びかの大競争に於ては、愈々疲れ果て、弱り果て、危き事、累卵の如く、風前の燈火も、雷ならざらんとす。乃ち勇毅能力の王に信頼すべきは勿論、又王の右に立てる女宰、敗れざる將帥に趨り就きて其庇護を祈るは、最も急務にして又最も利益なりとす。著者は讀者が此小傳について其靈益を圖られんことを希ふ。

大正四年十二月廿二日

イサイヤ 水島朽葉識



訂増 至聖 生神女 マリヤの 略傳。

目次

總論

第一回 至聖なる 生神女の 誕生

一、老夫婦の 痛歎。

二、老父母の 慶賀。

第二回 至聖なる 生神女の 進堂

第三回 至聖なる 生神女の 福音

一、至聖童女の 淨配。

二、福音の 天使。

三、救世主の 降誕。

頁數

一一三

一一二

一一一

一五

一〇

- 四、至聖 生神女の 悲音。……………三五
- 五 エギベトにあける 聖家族の 逸事。……………四一
- 第四回、至聖 生神女の 就寢。
- 一、救世主 釘架後の 生神女。……………五三
- 二、至聖 生神女の 傳道。……………五六
- 三、至聖 生神女の 寢らるゝ 前兆。……………六一
- 四、光榮なる 永寢。……………六六
- 五、至聖なる 遺骸の 葬送。……………六九
- 六、生神女の 復活と 昇天。……………七一
- 第五回、至聖生神女の 庇護。……………七五
- 第六回、至聖生神女の 容儀と 高德。……………八一

増訂 至聖 生神女 マリヤの 略傳。

總論

「今ヨリ後萬世我ヲ讚美セン」(ルカ福音一)。

此は我が正教會の悉くの聖人よりも、悉くの天使よりも、尙大に尊まるゝ所の至聖なる童貞女——生神女——マリヤが御自分に御歌ひなされた御言でござります。即ち童貞女の御身に出來た非常なる大事件の爲に、感喜極まつて奇蹟的にお歌ひなされた聖歌です。其お言の大意は「今ヨリ後」即ち全世界の救主を生むが爲に童貞女の御身が神に選ばれ

給ふた時から後、『萬世』即ち至聖童女マリヤから身を藉て人と成り給ふた神の子を信ずる所の萬世、世界中の衆の人人は、『我を福である』と謂て至聖童女マリヤを讚美するであらうとの意味です。實に此お言のとほり、至聖なる生神女マリヤは其御身に神の子救世主を御宿しなされた非常なる大事件の行はれてこのかた、何れの世にも何れの國にも、救贖を望む大衆の爲に、人間の中では此上もない尊いお方として尊まれてゐます。されば我らはこのいと尊いありがたい童貞女、神の母なる至聖マリヤが斯世に顯はれ給ふたときは如何なる有様であつたかといふことから其聖なる生涯の遭遇はどのやうであつたかといふことを知るのは、甚

だ緊要て又潔き趣味のあることとてござります。

正教會は此至聖なる生神女マリヤを光榮して記念するがために、又我ら信者の救を願ふがために、毎年左の如き重なる祭を行ひます、即ち

- 第一、至聖なる生神女の誕生……………九月廿一日
- 第二、至聖なる生神女の進堂……………十二月四日
- 第三、至聖なる生神女の福音……………四月七日
- 第四、至聖なる生神女の就寢……………八月廿八日
- 第五、至聖なる生神女の庇護……………十月十四日

今我らは彼女の傳を述るに付て此やうな順序に定めてお話申しませう。(因に云ふ、生神女とは神を生んだ女といふこととて即ち神の母といふのと同じ意味です。勿論これは神の

性を生んだのではない、救世主の人の性を生んだのです。けれども之を生神女として崇むるのは、彼女は人性を生んだのに相違はないけれども、それは尋常の人の性ではない、神の性を伴ふ所の人を生んだのであるからです。故に聖書にも彼を『エンマエル』又『主の母』（即ち生神女と同義）と名けてあります。又『童貞女』とは童身のまゝなる貞潔の女といふことで、曾て其身を世の人に汚されぬのみならず、其心にも亦一點の汚れもない極めて清浄な女のことを謂ひます。至聖なるマリヤは實にこのやうな童貞女でしかも永久の童女でした、それらの事は此傳をよく御覽になれば分ります。



主の迎接

第一回 至聖なる生神女の誕生。

一、老夫婦の痛歎。

今をさること 大約 千九百幾十餘年のむかし、イウデヤの國
 ナザレトといふ小な村に イオアキムと アンナと 云ふ 老人
 夫婦が ありました。其先は 有名なる 聖王 ダビドから 出た 貴
 い 家柄で、二人とも 神の前に 敬虔なる 義人でした。けれども
 二人は もはや よほど 年を取たのに まだ 一人の子供も 生む
 ことが できなかつたのは 大なる 悲哀でした。我が國でも 年寄
 になつて 子供の一人も ないのは 心細いものですが、殊に
 イズライリと 申す 國の人は 子の多いほど 神の恩寵の多

いしるしと信じ、子のないのを以て大なる耻辱として
ゐましたから、此やうな國民の中に在ては、此老夫婦の心
痛は又一層深くありました。(こゝにイズライリといふ
のも、前にイウデヤといふのも、もとは一つでした。)

そこで老人夫婦はいと熱心に祈禱して、全能の主に一子を
給はることを願ふて居ました。ある大祭のとき、衆くの人々
は神に禮物を上つらうとして、各々首都なるイエルサリム
の聖堂に参ります。イオアキムも、その人人と同様に何か
禮物を上つらうとしてゆきました所が、祭司の長と民の有
子どもは忽ち之を差止めて其上、この老人を罵つて『イオ
アキムよ、お前は罪深い人である、どうして他の人のやうに

禮物を上つることがでくる者か』と放言しました。さなきだに
子なき痛歎に心をいためてゐる不幸なる老翁は、この無
情なるひどい言を聞いて、むねんの涙を止め得ず、すごとく
とそこを出て、我が家にも立還らず、其まゝある野原にゆき
ました。そして胸を打ち、地に俯伏し、熱き涙を溢して、全能の
主仁慈の神に祈りました『イズライリの主なる眞の神よ、い
やしき僕を憐れよ。爾が我に一子を賜はざれば、我は今より
此野原を住居と致し、涙を飲んでこゝに留らん』と申しまし
た。乃ちこれから四十日の間、この野原で禁食せうとおもひ
ました。

その間に、イオアキムが聖堂で祭司の長などに辱められた

といふうはさは、其妻なるアンナの身にも入たのみならず、夫イオアキムが内にかへらぬのを見て、同じく不幸なるアンナは、いたく歎き悲みました。而して自分でいふのに「我が罪深いからこそ神の怒りにふれてこの年になるまで、只の一回も産の賀を得られないのである。そのため大事な良人にまで人前で耻をかゝせたとは果して如何いふことであらうか」と、千々に心を亂した。けれども此様な場合にも、恵みふかき神に祈禱することを忘れませんでした。

アンナは全能の主を待みつゝある日いと奇麗な園に行て樹の下に俯伏て熱切の祈禱をはじめました。其からしばらくして頭をあげるとかなたの樹の枝に小鳥が巢を造つていと楽しいに雛を育てゝゐるのを見ました。只これだけのことで、すけれども心に憂ひあるアンナの爲には忽ち大に感じました。あゝ鳥でさへも雛を持って楽しんでゐる、野の草さへも實を結んでゐる、萬物はみな天に在す父の光榮をあらはしてゐるのに、我のみがひとり人の母たる光榮を享ることができぬであらうかと、一は哀しみ一は望みつゝ、益々信仰の念を燃して「主や我をあはれめよ、神や我が耻を雪ぎたまへ」と祈りました。而して彼は主から若し子をたまはつたならば之を神の堂に獻じて終身聖務に服させることを誓ひました。

二、老父母の慶賀。

此燃る火のやうな熱心の祈禱に由て老婦アンナは實に人の母たる光榮を得ることができました。否啻に人の母たるのみならず、神の母の母たる光榮を享ることができました。御覽なさい、神の使は彼婦に現はれていひました、「アンナよ、汝の祈禱は天の臺前に達たり、神は汝の哀痛を見て、汝に一人の至福なる女子を賜はんとす、この女子に依て幸福は天下に降り、萬民は救ひを得ん、汝は其子をマリヤと名くべし」と。之を聞て、アンナの喜びと感謝にあふるゝ心のありさまは實に形容の言もないぐらゐでした。彼婦はこの大なる喜びを以て直に立て感謝の爲に聖堂に參ら

うと思ふてイエルサリムに行きました。「マリヤ」はエウレ
 「イ語で譯すれば「高尚なる人」或は「主婦」の意」
 天使は又野原に於てイオアキムにも現はれて告げました。
 『イオアキムよ、汝の祈禱は天の神にきかれたり、神は汝に恩恵を垂れ、汝の妻アンナに女子を生ましめん、萬民はこれに依てたのしまん。汝はすみやかに起て、イエルサリムにゆけ、かしこに聖門の傍に於て啓示を得たる妻にあはん』と。イオアキムが前に祭司長などから辱めの言をきいた同じ耳に今は神の使から此様なめぐみのお言をきいたのは、何様にありがたくうれしかったてしやうか。
 さればイオアキムは非常な喜びを以て神をほめあげ、感謝

の心にみたされて、イエルサリムにゆきました、ところがはたして啓示をうけた其妻 アンナに逢ひました。そこで互に天使の言を語り合ひ、ともに今度は無難に感謝の祈禱をたてまつつて、わが家にかへることができました。爾後、いよく臨月となつて老婦 アンナは果してリツはな女児を生みました。そこで親類や知己はもとより村の多くの人人は、各々共にイズライリの神をほめあげました。まだ幼いマリヤの御身は、實に夜光の玉とも、樂園の花とも何ともたとへ方のない崇美でした。殊に其性質が溫柔に恰剛で、よく父母に従順てゐられました。されば両親のふかくこれを愛することは勿論、又大に敬重にして育られました。

ました。このとほり、イオアキムとアンナは、その初め久しく神の恩寵がなかつたやうでしたけれども、決してなかつたのではない、睿智なる主はかれらの靈魂をこゝろみて、益々忍耐と信仰の徳に堅め、而してのちに世の常にたちこへて最も大なる恩寵、すなはち神の母の父母たる光榮をあたへ給はらうとする所のいとありがたい聖旨でした。なほこの至聖なる童貞女が、かたちのうへでも大に美しかつたのみならず、殊にたましひの美しくして、道徳の上に高くあつたことは、この巻の終りにつまびらかでありま

『シゼイナル、シヤウシンヂョヤ、ワレ
ラノタメニ、カミニイノリタマヘ。』



聖童女の進堂

第二回、至聖生神女の進堂。

霜枯の老木にも新しい蒼が出て、俄かに春のよるこばしさをおほゆる神の祖父母イオアキム、アンナの家庭に於て、普通の人情からいへば、一瞬間の間もこのいと愛すべき新しい蒼を手ばなすことは忍びなかつたでしやう。けれども神の前に義なる老父母は前の誓ひを重んじて、この至愛の童女を神に献ずる爲めに、彼女を携へてナザレトの我家からイエリサラムの聖堂に行かねばならぬときが來ました。それは至聖なる童女はもはや三歳に満たときでした。聖ゲルマンといふお方がこのときの義婦アンナの懷を述

て申してゐますのに、『主よ我は悲哀の心を以て爾にちかひし我が誓約を爾に行ひ奉る。我之がために祭司と親戚を會し、彼らに告て云ふ、我とともによるこべよ、我今なんぢらのまへに人の母となり、女を齎して之を天の王にたてまつる』とありました。實に敬虔なるアンナの胸中は此様にあつたでしやう。

そこでかの兩親は其親類や友達と共にまだ漸く三歳ばかりなる嬰女マリヤをつれて、勇ましく神の家に進みました。そこに衆多の美しい童女は各々美しい衣裳をつけ、手に燭をもつて莊嚴に伴ひました。これまで神に献ぜられた者があつたときは、祭司の長は聖堂の入口に出て其本人を

受取り之に降福するの例でしたから、時の祭司の長なるザハリヤは其入口に出て、至聖童女を迎へました。そこで同伴の人々はみな堂の階前に立止つたのに、至聖童女マリヤだけが只ひとりさつさつと(凡そ十五段もある)階段をのぼりました。しかるに祭司の長はおもはずしらずこの童女をつれて至聖所の中まで入たのは、ひとしほふしぎな出来事でした。そもこの至聖所と申すは祭司長の外、何人も決して入ることができぬ所で、其祭司長てさへ一年に只一度の外入られぬのでした。それにこのとき祭司長ザハリヤが童女マリヤを導いて其神聖な所に入たのは、彼れ自らも自分の所爲がわからぬで、只この童女には何か大なる聖

慮があるのだらうと思ふたといふことですが、實にこれは神の默導であつたのです。將來神救世主を其身に宿しいと尊い神の母となり給ふお方であれば、すなはち神の宮の至聖所に入り得ることの特典は、この至聖童女にもツとも適當であつたてしやう。

それからイオアキムとアンナは最愛の獨生子を神の堂にのこして親族らとともにナザレトなる我が家にたちかへりました。あとで童女マリヤは常に聖堂で教養せられ、其側に別段にたてられてゐた家にすまはれました。而して日夜熱心に祈禱するのと聖書を讀むのと神の務に服事することの外、相應の手工をなさるゝばかり、決して世の常の女

子らのやうに、衣裳の華美に迷ふたり浮世の娛樂に心を奪はれたり、嫉妬、誹謗、忿念などのなかつたことは勿論、一切罪の性行を有たるゝことは微塵もありませんでした。これは神の恩寵が大に臨んであつたのは固り、至聖童女御自分にも自由を善に用ひて、戒愼ふかく、信仰と望の誠なる所から、このやうな恩寵を受けるにたへられたのです。

そののち幾ばくもなく彼女の兩親は永眠に過ぎました。(イオアキムは至聖童女の進堂後間もなくねむり享年八十歳其から二年ほどたつて、アンナもねむられた享年七十九であつたといふことです)。されば童女マリヤはこゝに煢然孤女となりました。けれども聖神はつねに至聖童女と共に

して、ゆたかな恩寵を以て保護られます故に、すこしも世の中
のいざなひにかゝらぬのみならず、ますます成徳に進ま
れました。それでも童女マリアは決して自分の成徳をほこ
るといふことはありません、却ていよくけんそんして
神の前に自分を不當なものとなし、自ら上帝救主を望ん
で、永く童貞の生活することの誓ひを立て、いと嚴肅と貞
潔と勤勞を以て神の堂に月日を送ること茲に十一年と
なりました。



(次の挿圖の解は
三十二頁に詳)

聖童女がエリサベータを訪ふ



Горня. Мѣсто свиданія Пресвитой Богородицы со св. Елисаветой.
Горня. Мѣсто свиданія Пресвитой Богородицы со св. Елисаветой.
Горня. Мѣсто свиданія Пресвитой Богородицы со св. Елисаветой.

第三回、至聖生神女の福音。

一、至聖童女の淨配。

満三歳のときに聖堂に献ぜられて其から十一年たったの
てすから、童女マリヤは丁度十四歳になりました。そこでイ
ウデヤの國では十四歳になると是非婚嫁せねばならぬと
いふ法例でした。されば至聖童女を護育てゝゐた聖堂の祭
司らは法例に従ふて彼女を他に遣さうと致しました。所
が彼女はかねて神に誓ふた生涯童貞の心願のことを以
て固く婚嫁を断りました。神に對する誓ひは固り重い、こ
れを破るわけにはゆきません。けれども國の法例をも守

らねばならぬ。そこで祭司らはこゝに一策を案じて、幸ひ童女マリヤの親戚にイオシフといふ義しい老人がありましたから、只外儀上で彼女を此老人に聘定されたものとしてこれを托しました。このイオシフと申すはやはりナザレトに住てゐて大工を業とする貧しいくらしの人でした(けれども、やはり聖王ダビドの裔でした)。いと尊い童貞女マリヤはこの貧しいイオシフの家においてになり、御自分にも手工などの勞作をなされて家計をたすけてゐられました。

二、福音の天使 ナザレトの貧家に臨む。

ナザレトといへばガリレヤ郡中で、邊鄙な一村落です。其一村落の中で又最も貧しい木匠の家に、ガウリイルといふ尊い天使長が御光臨になつたのは驚くべきことと思はれまじやう。けれどもその尊い天使長よりもまだ高く尊くなりたまふ至聖童女が、この微賤なる大匠の家に、おすまひになつてゐるのはなほ驚くべきです。而してこの天使長が神の命を承はつてこの至聖童女に告げた所の要事は尙更大に驚くべきです。それは何故であるかと申すに、神は世を愛するの甚しき、其獨生子を賜ふに至る、其しかたには世界始まつて以來會て有たことのない童女懷孕といふ一大奇蹟を以てせらるゝ其非常なる福音を告る所の一大要事であつたからです。それは至聖童女がイオシフの家に

移ッてからあまり間もなかつた時です。天使長ガウリイルは童女マリヤにあらはれて先づ『恩寵を蒙る者や、慶べよ、主は爾とともにす、諸女の中、爾は讚美たり』と申しました。童女マリヤはこの言を聞いて驚き訝りつゝ、この問安は何事であるかと思ひました。併しながら此驚きと訝りは決して世の不信仰者の懼れ疑ふやうなものとはわけがちがひます、即ち至聖童女の謙遜と沈着から出たのです。至聖童女は其先は王族で、貴い御身分でしたけれども、今は世の常の目からみれば非常に零落て貧賤な身分となつてゐられます。靈魂のからは世の貴婦人、王妃などよりも、貴いに相違ないけれども、至聖童女御自分には非常の

謙遜家ですから自分を神の前にたへぬ者と認めてゐられました。故に今天使長から我を『恩寵を蒙る者』といつて特別の敬禮を表したのは訝しいわけだ、又我を『諸々の女の中で一番福ひな者』のやうにいつて非常の敬禮を施したのは何故であらうかと、これらのいみを御考へになつたのです。そこで天使長はこのわけを説明して申しました『マリヤよ、懼るゝなかれ、爾は神より恩寵を得たり視よ、爾は子を生まん、其名をイイススと稱ふべし。かれは大なる者となり、至上者の子と稱へられん。主神はその先祖ダビドの位を以てこれにあたへ、かれは永くイアコフの家に王となり、其國は終りなからん』と。

この言の初めに「懼るゝ勿れ」とあるのは、即ち「訝る勿れ、安心せよ」とのいみで、勿論決して罪人や奴隷のやうなおそれかたをなすなとのいみではありません。それはこの前にあらはれた所から考へてもあきらかです。又此言の中に「其先祖ダビドの位云々」とあるのは神がむかしダビド王がよく痛悔して、主神の命に従順ふてゐたのを嘉して彼王に、世々その王位を踐てゆかれることを約束されたことがあつたからです。而してこれは勿論ダビドの族から出る王の永遠なるべきものがあることをいつたので、即ちイエススハリストスが教會の方で永遠の王となりたまふた事に於て成就するのです。—即ち主イエススハ

リストスが神たる傳道を以て、普世萬民に王とならうとする神立國の位です。—それから「イアコフの家云々」といふのも、直意をいへば列祖イアコフの生んだ十二人の子から出た所のエウレイ民だけをさすやうですけれども、これは救世主イエススハリストスは固り全世界萬民の王であるところのいみを含んでゐます。但救世主も肉體によればエウレイ民から出て給ふたので、救ひの道はイウデヤ人から始まるべきによつて（イオアン四）このとほり申されたのです。エウレイ民でなくともハリストス救世主を信するものは、みな心靈上イアコフの家に屬するものです。まづこれらのことはこれまでよく舊約聖書をおよみな

された聰明なる至聖マリヤに於ては、もとよりよくお分り
になつて別に不審もなかつたやうですが、只一つ大に不
審なのは、まだ夫のない(イオシフは名義だけの夫なれば、)
獨身の我が子を生むといふことでした。それで童女マリ
ヤは天使に尋ねて申されました、「我は、いまだ夫を知らず、
何に由てこのことあるべきや」と。これは無論正直の心か
ら出た當然の不審です。なぜなれば夫のない童女が子
を生むといふ例はこれまで全くない、(是後とても決して
ない。)人間の知識ではとても想像することもできぬ一
大ふしぎであるからです。そこで賢き童女は敢て天使
の言を疑ふのではないけれども、この現に我が身に臨む

この上もないふしぎな出来事のありさまを知ておきた
いと思ふて此問をなされたのです。それで天使は直に
之に答へて「聖神(靈)まさに爾にのみ、至上者の能爾を
庇蔭はんとす。この故に爾が生むところの聖者は神の子
と稱へらるべし。視よ、爾の親戚エリサベタを、彼婦は年老て
男子を姪めり、彼婦はもと不妊者と稱せられしに、今既に六
ヶ月なり、蓋し神に在りては能はざる所なし」と。かく天使は
大いにふしぎな出来事のかならず行はるべきわけを説
明したのみならず、又エリサベタと其夫ザハリヤといふ老
夫婦の外まだたれも知らぬ所の事實を引いて證據としま
した。是に於て至聖童女は大に神全能者の行事をさとり、

即ち謙遜を以て、溫柔に、天使長に答へて『我は主の婢なり、願くは爾のいへる如く我に成れよ』と申されました。これは即ち充分に天使の言を信じて、神の子が我から人體を藉る奥義のかならず成就するといふことの信仰と望を以て神の聖旨に全く服従たところの誠心をあらはされたお言です。されば福音の使者はもはや己が遣はされた要事を達してしまふたに由て、彼女からあちらに去りました。

かく至聖童女は大なる福音をうけて全欣欣喜に満つる所から、速かに旅行を思ひ立て、イエルサリムから南の方にあたるヘウロンといふ邑に親戚のエリサベタといふ老

婦を訪ひました。時に義婦エリサベタは至聖マリヤの問安の聲を聞きやいなや(童女の懷孕と親しい關係のある)己が胎内の兒は腹の中で躍り、自らは忽ち聖神に感じて大聲に呼で丁度前に天使のいふたとほり、『諸女の中爾はさんびたり』と唱へ、續いて『爾が妊みし所の者も讚美たり、我が主の母我にのぞむ、我何に由てこのことを得たる。かれは信ぜしに由て福ひあり、主のこれに語りたまひしことはかならず成らん』と申しました。これをきいて童女マリヤも朗聲に、應じて歌はれました。『我が心は主を崇め、我が靈魂は我が上帝救主を悦ぶ、かれはその婢の卑しきを顧みたり、今より後萬世我をさんびせん』と。

(ルカ一の四十六)。
から四十八)

古い繪に 至聖童女が 山地なる ザハリヤの家を訪ふて 義婦 エリサベタにお逢ひになつた所がありました。そこにきれいな 無花果の樹の 蔭に 『生神女の泉』と稱ふる 泉があるさうです。傳によれば 至聖生神女 マリヤが(三ヶ月間 ザハリヤ、エリサベタの定に 御逗留になつてゐた時に) 水を汲み においてになつた所ぢやと申します。(前二十一ページ)

夫とは假の名、其實は 至聖童女の 保護者であつた所のイオシフは 固りたゞの 人智を以て神の 奧義を知ることは できませんから、初めは 童女 マリヤの身の 只ならぬのを見て、疑ひを懷いて 心配しました。けれども 直に 主の使がかれにあらはれて、其懷孕の 聖神によることを しらせ、且つ

子が 生れたならば 其名を イイスマスと 稱けよといふこととまで、くはしく 告げましたから、乃ち 疑ひが 解け 安心して、それからますます 至聖童女を 敬重にして 保護しました。(マトヘイ一の)。
(十八―廿五)。

三、救世主イイスマス ハリストスの 降誕。

心ある 萬民が 一日千秋の 思ひをなして 待てゐた所の 天からの 大なる 使者、即ち 神子 救世主 ハリストスが 御降りになる 時期はいよく 到来しました。當時 ローマの 皇帝 ゲザリア アウグストと 申すは、其ひろい 管内の 人民に 詔して 戸籍調査を 致させました。そこで イウデヤ人は 各々自分らの 先祖が 出た所の 故郷に 還らねばならぬので、イオシ

フとマリヤはその布命に應じて 現住所なる ナザレトから
 故郷なる ビフレエムまで ゆきました。所が 旅宿は 大衆の人
 人の 爲に みな塞がツて 全ビフレエムの 郷中に この 義人と
 至聖童女と 二人の 身を 容るべき 餘地が ありません。されば
 二人は 人間の 宿でない 即ち 獣畜の 宿なる 洞穴に 入りま
 した。この とき 至聖童女は もはや 臨月でしたが 丁度 此夜
 安々と 神の子 救世主を お生みになりました。人の 家でない
 獣畜の 洞穴に、固り 錦の 褥も あらう筈もない、そこで 至聖な
 る 生神女は 神の子なる 嬰兒を 布に つゝんで 飼葉槽にお
 かけました(ルカ二の1か)。
 (生れた 至聖き 嬰兒は 先に 天使が イオシフに 告げた とほ

り イイスと 名はられました、其いみは 即ち 救世主とい
 ふ ことです)

四、至聖生神女の 悲音——救世主 進堂の時

に 於て。

イウデヤの國では 聖律法者モイセイの 立てた 法律に 依て、
 國民中 初に生れた 男子は、生れて から 四十日目、上帝の 堂
 につれて 行て 献げねば ならぬといふ ことでした。又 産
 をした 婦人は、潔めの 日と 稱へて、産後 我が家に 在て 身
 を 潔める ために 四十日の 内は 聖堂に 参ることが できませ
 んでした。(以下の 記事、前第一回の 前の 繪を 参看)

至聖なる 童貞女マリヤは 其至淨き 母たる 本來から いへば、

固よりこの潔めの法には服従ふ必要はない筈です。けれども謙遜にして従順なる童貞生神女は國の法律に服従ふことの善例を示すがために肅んでこの法を守られました。それで至聖なる生神女は産後四十日たつてから、冢子イエスス、ハリストスを主に献ずるためと御自分の潔めの祭をなすために、イオシフと共に冢子なるイエスス（ハリストス）を抱て聖堂においてになりました。律法の要求によれば冢子を生んだ婦人からは燔祭と贖ひの祭てふ法式の爲に、二歳の羔と若鴿を献ぜねばならぬけれども羊はずいぶん高價ものですから、貧者の爲めには特に羊にかへて二つの若鴿を献ずることを許されてありまし

た。故に至聖なる生神女は自ら貧者として二つの若鴿を獻せられました。さうすると丁度そのとき、義なるシメオンといふ高年の祭司は彼らを迎へて、聖神の默示によつて嬰兒イエススが救世主ハリストスであるといふことを知て、これを抱きつゝ、神を讚美して、神救世主を以て『異邦人を照すの光及びイスラエリ民の光榮』といひました。それから聖シメオンは、至聖なる生神女の方に寄て嬰兒をわたしつゝ、祝福して嬰兒の母なる生神女マリヤにいひました、『視よこの子は置かれてイスラエリの中に衆くの者の類れ又は興るを致し又論駁を受るの號とならん、又爾にも劍は魂を貫かん』と（四、卅五）。

聖シメオンのこの言は、すなはち生神女マリヤに關はる
 悲哀の預言です、前に天使は至聖童女に對して只喜悅の音
 信をつたへましたが、シメオンは悲哀の音信をつたへまし
 た。——即ち救世主ハリストスが後來世に立て神父の大
 使命を行ひたまふにあたり、人人の信仰と不信仰と、善と
 惡とによつて生ずる道德上審判の結果と、姦惡の世に立つ
 至聖生神女のいと患難なる遭遇とです。——「頽れ及び興
 る」とは、救世主ハリストスは丁度試みの石となつて信
 者と善人のためには興るべき隅石となるけれども、不
 信者と惡人のためには頽るべき蹟きの石となること
 を申します。「論駁を受けるの號」とは、丁度戦争のとき、皆

軍旗をめどとして、一方はこれをもつて防がうと力むれ
 ば、他の一方はこれに向つて攻て來るといふやうな具合
 です。すなはち姦惡の世は何よりも只一つに至善の主イエ
 ススハリストスを滅ぼさうとして敵對する、けれども信
 者らは主の旗下に立てこれをふせぎつゝ、苦戰する。實に
 今の世界も、無形上のありさまはこのとほりです。又「爾にも
 劍は靈を貫かん」とは、前と同じく形容の言でこの論駁を
 うくる主の旗下に行はるゝ信仰と不信仰の戰ひには主
 の母なる至聖童貞女の心も、いたく撃たれずにはをりませ
 ん。殊に罪なき主イエススハリストスが——現在我が胎に
 やどりたまひ我がてしほにかけて育てた我が(神の)子

が萬民の罪の贖ひのために甘んじて十字架に釘うたれたまふた其ときは、じつに兩刃の劍が、その胸を刺したやうに、生神女の心にははげしい痛苦を感じ給ふたといふことです。されど至聖なる生神女はこのやうなかなしいいたましい音信にも驚きたまはずして益々溫柔に、主のために、獻身的生涯を送られました。

こゝに又預言女アンナとイッて八十四歳の嫠がありました。聖堂に来てから、六十年といふ長い間、熱心に日夜祈禱を缺いたことはありませんでしたが、このとき彼婦も亦至聖なる神母に近づいて上帝をほめあげ、そのころ救を望んでゐた人人に普くこの子ハリストスのことを傳へました。

五、エジプトに於る聖家族の逸事。

至聖生神女はこれで法律の要求する所をつとめ終られましたから、イオシフと共に(或必要に迫られて)再びピフレエムにおかへりなされた。所がイロドと申す暴君が嬰兒ハリストスを殺さうとしてピフレエムと其近傍の嬰兒をみなごろしにするといふ大惡令が出ましたから、天使の默示によつて、産後あまり間もない生神女はイオシフと共に難を避けてエジプトと申す外國においてになり(それからしばらくすると、イロドが死にましたから)又もとの住所なるナザレトにおかへりになりました。此通り至

聖生神女の身の上には神の子を御生みになつた早々、種々
危難ことやお心をいたませたまふことがありました。

聖なる家族がエギベトに行て在たことは、聖書にいふて
ない、故に果してどのやうな遭遇であつたかといふこ
とは、今斷言することができません。けれどもそれについ
て知識を望む讀者の爲に、お報知申すこの傳の中に種
々な話がござります。(以下第四回の前の圖參看)。

聖家族がエギベトの境に入て急ぎの旅路を休んだ最初
の場所は、マタリエといふ村てありました。此村に入てイ
○ オシフは、暫時の假宿を尋ぬる爲に聖母と神の乳兒を或
大樹の傍に残しておきました。其大樹は村の入口に近く

立てありました。所がその繁つた木葉が、自然と聖なる旅行
者の方に向てこれを日中の炎熱と砂漠の苦しい旅から
援けて涼しい綠蔭に憩はせるために、彼らを蔽ひました。
聖なる旅行者が休んだ後も、此樹は常に彼らを休ませる
ために傾いた時のやうな形狀で依然存立しました。且つ
其葉は、種々な病氣をなほす治療の能力を持つやうにな
りました。

右の樹についてこのやうな奇蹟の外、其近傍に満きき
れいな水が噴出しました。これに依て神の母は、御身の渴きを
を止められました。この泉は、今に存留てもやうど前の奇
蹟に由て傾いた樹の葉のやうに、この水にも奇蹟を施

す力があります。殊に此泉の性質の著しいのは、この邊の凡ての井や泉は大ていみな鹹味を含んでをるのに、この泉に限り淡水であることとでござります。こゝから程遠からぬ所に、この聖なる旅行者は、前途に往く間、しばらく滞留るべき家を見附けました。この樹と泉が今に存留てをることは、こゝに来て見る人人を驚かせる事實です(此を記した原書は一千八百七十年に第二版を出したものであれば、こゝにいふ今このいみは、其ころのことと知)。なんとなれば、その近隣のメンヒスだの、イリオポリだのてふ街市は、もはや打壊されて、今は僅かにその跡に依て大かたこのへんだっただらうと推測することができるぐらゐになつてをるのに拘はらず、この樹と泉は

大約二千年間も尙存留てをるからでござります。教會の歴史家ソズメンの説に依るに、聖家族はヒワイダ即ち上エギベトの境にあるゲルモポリスといふ所までお出になつたといふことです。又ソズメンは、他人の言に基ついて前のマタリエにある樹よりも尙一層奇蹟ある樹のことを申してをります。其言に「ヒワイダの街市ゲルモポリスに於て、多くの者は『ヘルシス』の名に依て樹を以て病を蔽ふといふてをる。苦む者に樹の露を注ぎ、或は葉を附け、若くは皮をつけてその病苦をなほすと云ふことです。これはどういふわけであるかと申すにエギベトに一つの傳がある。イオシフはイロドから免

れるために主イエス、ハリストスと聖生神女マリヤをつれて、ゲルモポリスに往たとき、ある一本の樹はこれまでこの街市に高く聳えてをったけれども、今近づき来る主イエス、ハリストスの前に敢てそのまゝ立てをることかできなかつた、てこの高木は忽ち地に屈んでハリストスを伏拜だといふことである。』余(歴史家)が惟ふに、この樹は街中で神の存在のしるしとなつてをったのか、或はそのあまり高く美麗であつたに由て異教の方で其地の神官どもに神とせられてをったのであらう。そこで己れを破る者(ハリストス)が現はれ來るとき、この樹の上に尊ばれてをった悪魔は、ふるひおのゝき、それについて樹

も亦搖ぎおのゝいたのであらう。預言者イサイヤの言に依るに、このときハリストスの照臨たまふに因て、エギベトに於てすべての偶像が戦慄いたことである。あくまを逐出すしるしとして、又此事件の證據として、そのときからこの樹が、信者に治療を與ふるやうになりました。エギベトとハレステナに於て各人がこの出來事を、何人も知り且つ話してをります。』もつとも今時は聖なる家族がエギベトに在たことについて其地の傳の中に、ゲルモポリスといふ名がありません。これは破壊時代の舊きに由て之を土地の人人の記憶から抹殺したのであらう。又ある古傳に依れば、神の母は永遠の嬰兒と共にベニユ

セフといふ街市にお棲居になつたといふことである。このまちは、バビロン(即ち舊カイロ)の在た所からニール河に依て三日の水路にある所で有ました。彼處に居るものは、この説を確めていふてゐます。——この聖なる場所に今でもハリストス教の禮拜堂の殘礎が存てをると。——もしもこのことを考古學から調べてみれば、コントフの傳に依ても取ることが出来る。なぜなればイオシフの名は、(エウレイ語でベンユセフ)義なる老人が潛家とした所の名稱となつて今に残つてをるからである(エウレイ語の名の「ベニユセフ」となる。この地)。師父等から傳へられた傳に依て、エギベトのハリステアニ

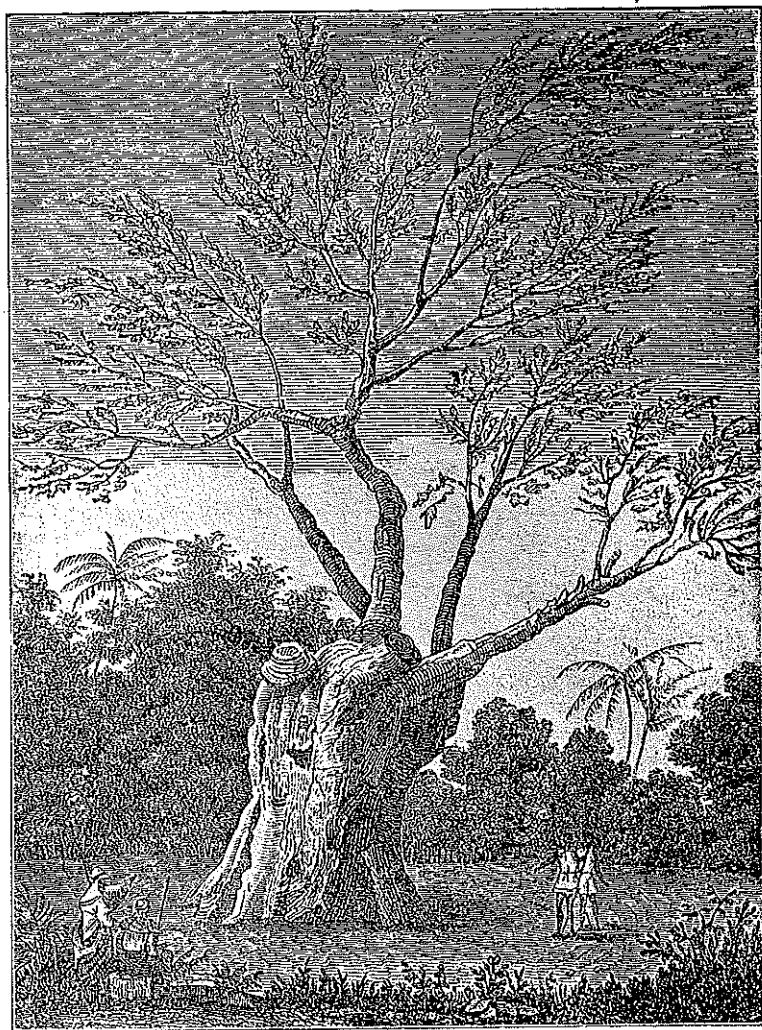
ン等は、舊カイロに於て世の先よりの嬰兒が棲ひ給ふた所は舊くからハリストス教の聖堂になつてをる家或は洞穴であるといふことを指示してをります。……此聖なる場所に於て、アルタリ(至聖所)の右左からイユノスタス(聖障)の前の高い部分に二つの下に降る戸がある。この戸のところから聖なる家族が棲居した洞穴に通ずることが出来る。このほの暗い聖なる洞穴の中に、生活上ある適當な品物が在た。その中央の前の方の壁に添ふて深く凹んだ所が有て、そこに至聖童女が神の嬰兒を寢かせられました。ゆゑにそれを「イイススの搖床」と名けます。至福なる母自身は、この凹みの床と接した石の床に

お休みになりました。それから左手に添ふて小さな壁の後ろに四角な凹んだ所が有て、そこに聖なる旅行者の家族の爲に、食堂が有りました。それはあまり狭いこともありません。その廻りにこの洞穴を區劃るための細路が有た。食堂から程遠からぬ長い壁の下に、凹みのついた所てちやうど鉢のやうなものがつけられてあつた。これは昔の風俗に由て食前と食後に又は朝に洗ふための用に供せられたものである。「揺床」の場所から右の方に又小さな壁が有て、そこに至聖なる嬰兒のため浴室が有た。又他の長い壁の方面に洞龕が造られてある。これは大かた衣物を入れた所てあらう。要するに此

洞穴は、方三間半より廣くはないやうです。

聖師父らの説に依るに主イイスス、ハリストスがエジプトにお出でになつたとき、方々の偶像が破滅びたといふことである。この傳の古いことと又いみのあることに依て考ふるに、つゝしんでこれを探ることができる。若も曾て聖なる品物を入れた約櫃が、ヒリステヤ人の偶像堂に入てかしのこの偶像を粉砕に破滅したならば、どうしてか悉くのエジプトの手造物が、かの御身自ら現はれたまふた上帝そのものの前に慄然たらずにをられましたやうか。

次の挿畫についでには前
四十二頁に詳かなり。



樹女神生のエリタマ

第四回 至聖 生神女の就寝。

一、救世主が十字架に御懸りに成た後の生神女。

至聖 生神女は、前項に申したエギベトの避難地からナザレトにおかへりになつてから、常に其子なる救世主 イイススハリストスと共に居られました。けれども此至潔き家庭のたのしみは、地上に於ては長く續きませんでした。それは神の定旨によつて、このいと愛すべき母と子とはや別れを—しかもきはめてかなしいわかれを—告げなければならぬ境遇に迫りました。これもとより神のすくひの奥義を悟り給へる至聖なる生神女に於ては既に御承

知のことであるとは申しながら、現在我が生んだ子が
一點の罪もなくして極重悪人どもの手にかゝつて苦みと
辱めの至極なる十字架に釘うたれて死たまふを見ては
いと賢い光明なお方とはいへ、母の心として悲まずには
居られません。されば至聖なる神の母は「ゴルゴハの山に於
る主の十字架の傍に立て、いたくなげき悲まれたこと、實
に義なるシメオンの預言に所謂『劍で心を刺さるゝ』やう
な、隠々たる苦腸萬斷の御哀働でした。そばで見てゐる
母の悲みがこのやうであれば、現實刑架の上に全世界
の罪を一切引受て苦み給ふ御子 イイスマス ハリストスの
御心は如何やうにあつたてしやうか、我らは實にこれを

名状することもできません。そのやうな千萬無数の苦みの
中に在ても、至愛の子 イイスマス ハリストスは御自分の母を忘
れたまはず、十字架の上から、其下に母と同じく愛使徒イ
オアンの立てゐるのを見て、彼は聖使徒イオアンに向て
「汝は我が母を見ること自分の母の如くせよ」と申され、
又母に向つては「爾はイオアンを見ること我の如くせよ」
と申されました。是お言に従ひて至淨なる主の母は（主の
斯世をさられたのち）シオン山なる神學者聖イオアンの住
家に同居したまひ、互に母子の如く親しく生活されました。
あゝ誰か、我が主ハリストスの教に忠孝のことなしと
謂ふか。主が萬死の境に在て、尙かくまで母を慮り給ふの

厚き、これが孝行でなくて何でありませうか。この心を以て君に向へば即ち忠國に盡せば則ち愛國です。それは救主イエススハリストスを初め諸聖師父の教と性行とをよくしらべてみれば明かてあります。

二、至聖生神女の傳道。

至聖なる生神女はエレオシの地方に在て主の福音を傳へ給ひ、且つつねに其子なる救主イエススハリストスが苦みと死をおうけになつた遺跡なるゲフシマニヤの園とゴルゴハの山に往て祈禱されました。これから主の御門徒の間に聖地巡拜の敬虔な風習が起つたといふことです。イエルサリムのハリステアニンらは大に主の母を尊ん

で、殊に其默識と恩寵に因る御親教を聞くことを大なる樂みとしてゐました。門徒らは先に自分らの杖、柱とも、親とも頼む惟一の主に別れてから、心細い寂しい所に、其主の母が伴ひ給ふて懇ろに慰め誨へてくださったのは實に大なる仕合せでした。

時に聖使徒らは、傳教の部署を定むる爲に各々鬪を抽たことがありましたが、それに至聖生神女も加はりなされて、同じく抽かれました所がアホン山が當りました。けれども實際そこにおいでになるのは上帝の旨によつてずつとのちになります。

そののち數年たつて、暴君イロドが信者らを窘迫ること

が始まりました。故に生神女は免れて神學者聖イオアンの傳道してゐたエヘスにおいてになりました。それから數月ののち、キトブルといふ島に主教となつてゐた所のラザリといふ人を訪はふとして、船にお乗りになると俄かに大風が起つて船は波間に漂ひつゝ、海のかなたなるアホン山の下につきました。この山の中には多くの偶像がありましたが、至聖なる生神女が御上陸になると、ふしぎにも悉くの偶像がみなひとりてに倒れて打毀れてしまひました。至聖なる生神女はここに御滞在になつていとねツしんに福音を傳へられましたところが衆多の人は、まことの光をみとめて救ひの道につきました。されば、至聖

なる生神女は大によろこび給ひて申されますのに「この地は我が子即ち主なる神が(聖教を傳ふるがために)鬪を以て我にあたへ給ひし所である。故に我はいまから永くこの地の守護者及び仲保者とならう」といふお言てした。そこでこれから今に、アホン山の教徒らはこの地を名づけて『神母の鬪』と申すさうです。それから至聖なる生神女は豫期の如く、キトブル島におわたりになるためにアホンの土地を御出發になりました。(下の七十四ページの次の圖)
そののちイロドの窘迫も、少しはやみました故、至聖なる主の母は又イエルサリムにおかへりになりました。所が都のハリステアミンらは大によろこび躍てこれを歓迎ま

した。アレオパグの聖デオニシイは、殊に熱く主の母に面謁を望んでゐましたが、このときはじめてお目にかゝったといふことです。(當時の景状を(後の八七)彼れ自らのちに述べてをります)それから主の母は都に御滞留なさることが數年でした。しかるに頑固なイウデヤ人と異邦人らは、ハリステアニンが至聖なる主の母を尊び愛するのを見て、嫉妬の念を起し、大に主の母マリヤをにくんでこれを殺さうとしました。それには平生は教徒らがよく警戒してゐるから、かれらも容易に悪意を遂げられぬので、かれらは至聖なるマリヤがゴルゴハにおいでするときを待て密かに捕へてこれを殺さうとはかりました。けれど

も全能の主は至聖なる生神女がこのやうな毒手にかゝつて横死するのを欲し給はず、彼女が光榮の中にかゝやいてしづかにこの世から逝りたまふことをのぞまれましたから、常に彼女を平安の途にお保護になりました。

三、至聖なる生神女の寝らるゝ前兆。

至聖なる生神女は一日エンオン山に行て祈禱してゐられましたが、忽ち天使長ガウリイルがあらはれて手に翠滴る稷欄の枝をもちながら「爾の子我らの神は、此度爾を天國に迎へ取りたまふ。爾は世々彼と共に福樂を享らる」と申して、乃ち主の母マリヤはもはや三日の後に必ずこの世を逝り給ふことを告げて、其手に持てゐた天國の一枝

を主の母に與へて去りました。これをきく、これをうけて至聖なる生神女は喜びたまふことかぎりなく、恭しくひれふして主に感謝の祈禱をたてまつり了てシオンなる聖使徒神學者イオアンの家におかへりになりました。

聖使徒イオアンは、何時になく今日は至聖なる生神女のお顔に欣悦の色があるのを見て、甚だ訝しく思ひました。それて至福なる生神女マリヤは聖使徒に、今日エレオンの山で悦ばしい啓示を受けたことをお話になり、かつ特に、彼に御遺言をなされて『我がいま世をさつたならば、爾ら
は我が遺體をゲフシマニヤの森にある父母とイオシフの側に葬てくれよ』と申されました。

聖イオアンは大に驚きながら、早速イエルサリムの主教と至聖生神女の親戚故舊とは固り、方々のハリストアニシらに、この一大事を報せました。さればみなく大におどろき心配しつゝ、直に馳せ來り、年來いと慈しみ尊む所の主の母に、永のお別れをせねばならぬかと思へば、悲しくで歎かはしくて、みな共に泣かぬものはなかつた有様でした。そこで主の母は彼らをなぐさめて『我が天國に行くなれば世々爾ら兄弟のために祈禱するであらう。されば今我がこの世をさるのはそのやうに悲むに及ばず我となんぢらとのためにまことによることぶべきことではないか』と申されました。而して前に天使長から貰ふた天

上の一枝を示されて、其福ひなる啓示のことを御弟子がたにも傳告になりました。

かく至聖なる主の母のためには、死はすこしもかなしむべきでない、けれども彼女が今生の唯一つの願ひといふは我が主の子又兄弟とも稱へらるゝ聖使徒がたに面晤てゆきたいといふことだけでした。されども奈何せん、聖使徒らはこのとき、各々主の道をつたふるがために遠き國々方々の村里に散り別れてゐることです。から、固り今のやうに電信もなければ汽車や汽船の便利もなし、たとひそんなものがあつたとしても、或は幾百里幾千里とはなれたところから、今二三日の中にみな呼び集めうとする

のは、とてもできぬ話です。けれどもできました、全能なる神の力によつてこの難いことが奇蹟によつて行はれました。乃ちいまさう思ふてゐる一瞬間に各(遠方から)聖使徒らはイエエルサリムにあつまりました。十二使徒中で只一人(ホマ)が來なかつたばかり、あとはみな、他の聖使徒パエルも、聖テモヘイなど、數人とともに參りました。各々同時に同所に――至聖生神女の門外に――立て互に驚愕に打たれしばし言をも發し得ないぐらゐでした。それから各々は内に入て、至聖なる主の母にお目にかゝつた所が、主の母は彼らのきたのを見て大によろこばれました。而して不日御身の世をさりたまふことをお明しになりますと、聖使徒

らは又みな大になげき惜みました。そこで又至聖なる
主の母は彼らをなぐさめ『汝らは此大なる慶事をなげいて
はならぬ、只我が天國にゆくことを慶んで祝へよ』と申さ
れ、つゞいて『汝らはしばらくこゝにとゞまつて我が遺體
を葬り、而してのち汝ら各々の任地にかへれ』との御遺
言がありました。而して主の母は聖使徒らが福音を各地
方につたへた景況をお聴取になつて親しくかれらに降
福をたまひ、又萬民のために祈禱されました。

四、至聖生神女が光榮の中に寝り給ふ。

それからいよく三日めとなつて、至聖なる童貞女は天
使から告げられたおねむりの日が來ました。そこでこの

日は彼女の一生の聖日としてよあけからたくさんの燈
明をつけ、聖使徒らは洋々たる活た聲をもつて神を讚美
しました。而して童貞なる生神女は榻の上に臥しつゝ、心靜
かに終焉の期を待ちたまふ所にたちまち天からきれい
な光があらはれて全家に輝きましたから、ハリストスは
ッらは大に驚いて首をあぐると、主イイススハリストスは
いひつくされぬ光榮の中に、諸聖使と天軍をつれて降りた
まふのを見ました。さうすると童貞生神女は直に聲を
あげて『我が心主を大とし我が靈は神我が救主をよる
こぶげだし主はその婢の微賤をかへりみたまへり』と歌
はれました。丁度初めに神の子が彼女の御身にやどりた

まふことの福音をおうけになつたとき、聖婦 エリサベタに
應へてお歌ひになつた御詞は茲に復言されました。
それから救世主光榮の王なるハリストスは、御自分の母な
る至尊き愛すべき童貞生神女を愈其永遠の國にお迎へ取
りになりました。即ち至聖マリヤはこの世からいへば
永のねむりにつかれました。時に忽ち衆くの天使らは讚
揚て『生神童貞女や、慶べよ、恩寵にみたさるゝマリヤよ、主
は爾と偕にす、諸女の中にて爾は讚美たり』と申されま
した。これもまた前の生神女福音のときに天使長のつた
へた言と同じことです。此通り童貞女マリヤの至聖なる
生涯は、讚美を以て起り、讚美を以て結ばれました。

このとき 聖使徒とハリステアニンはつゝしみおそれて童
貞女の御身にちかづき視れば、童貞至潔の玉顔は赫々と
耀いて恰も日のやうでした。又室内には馥郁と芳ばしい
香氣がかをりわたつて得もいはれぬ心ちよき感じをあ
たへられました。至聖童貞女お寝りの享年は大凡六十以
上であつたといふことですが、確かなことは分りません。
只かの女が生涯童貞を以て善行美德を以て光榮の中に
世をさり給ふたことは至て確です。

五、生神女遺骸の葬送

至聖生神女のたましひはもはやこの世を逝られましたか
ら、此上の事務は乃ち其尊い遺骸を葬ることの一條です。

それについて 聖使徒らは 至聖 生神女の 遺言の とほり、ゲ
フシマニヤの園に 葬らうとして、聖使徒イオアンは 手に 椶
櫚の枝を 持て 前導き、他の 聖使徒らは 聖柩を 昇き、多くの
信者らは 後従ふて 異口同音に 讚美の 歌を 唱へつゝ、行列
を なして ゆきました。時に 忽ち かゞやきわたる 雲が 起ッ
て 其上を 覆ひ、上には 衆くの 天使の 讚美する 聲、下には
多くの 信者らの 讚揚る 聲と 相和して 洋々 堂々と いとおど
そかに イエルサリムの 城を 過ぎ、やがて、ゲフシマニヤの 森
に さしかかり、即ち 聖柩を 下して、これから 葬らうとすると
突然 一の 妨害が 起りました。——それは イウデヤの 祭司長と
民の有司どもはこの 聖葬りの あることを きいて、大に 怒り

て、聖門徒らに 辛き目を見せうとする のみならず、至聖なる
遺骸に 侮辱を加へうとする 悪謀です。そこで かれらは 暴
慢にも 兵卒をつかはして 聖使徒らを 逐ひ 且つ 至聖 生神
女の 遺骸を 焚滅ほさうと 企てました。けれども 右の かい
やける 雲は、俄然と 上から 壁の やうに 立て かれらを 遮り
ました。故に 兵卒らは これを見て 即時に めくらとなり、
又 死人の やうになりました。しかし その中にも、己れの 罪
を くい、主に 於る 信仰を以て、至聖 生神女の 墓前に 祈禱
して、乃ち 痊された 者も あつたと云ふ ことです。

六、生神女の 復活と 昇天

全能者の 佑護によつて 此通り 至聖童貞女の 葬送は 悪敵の

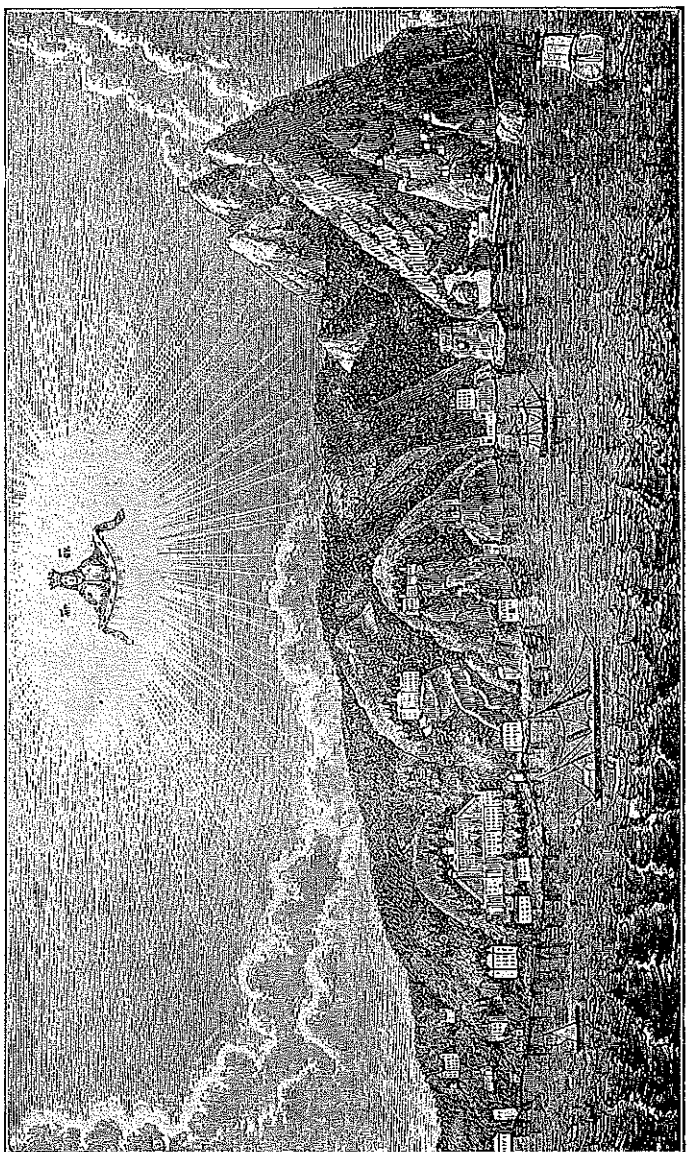
難を免れて其遺言どほりゲフシマニヤの森の中のイオズキム、アンナとイオシフの葬られた側の一洞穴に於て立派に濟されました。それから三日を過て聖使徒の一人ホマと申すが來ました。彼は前に至聖生神女のお寝りの際は印度の方に傳教にでかけてゐて、あの時の參集りに缺けたものです。それで彼は今かへつて見たところが、何もかもあとのまつりとなつて濟てゐたので、いたく残念に思ひました。せめて至聖生神女の遺體だけでも拜見したいと思ふたので、他の聖使徒らは共議してホマとともにゲフシマニヤの洞穴に至り、墓の門をあけて見ました。所がこはいかに中は全く空虚で、只聖屍を包んだ布が残つて

あるばかりでした。三日前たしかに納めた聖屍がたれも取ることとはできぬのに、それが無いとは、どうしたものか、とても驚かずにはをられません。そこで彼らは大にたまげ、只茫然としてゐましたが、つひに神に祈りました。いと愛する神の母の聖屍のある所ををしへたまはんことをかく祈禱してしばらくすると、神の母マリヤはいとうるはしく衆天軍を従へて彼らにあらはれたまひ、乃ち申さるゝには『慶べや、我は世々爾等と偕にせん』との御言でした。之を見て聖使徒らは大に喜び、覺えず『至聖なる生神女や我らの爲に祈り給へ』といふ新なる祈禱を上りました。さきに幾ど失望したやうな使徒ホマも大に勇氣を起し

感謝して、自分が初め他の聖使徒らのやうに至聖生神女のおねむり前にあはなかつたのは、却てそれよりも光榮なる生神女の復活と昇天を示し給ふわけとなつた御旨をさとりました。

じつに我らはこれによつて至聖なる生神女は死んで三日目に復活し、肉體を以て天に昇りたまふたことを信じます。又彼女は今に天の大なる宮殿に在て、常に我らハリスティアニンのために有力の祈禱してくださいることを信じてゐます。

次の圖に付ては五
七一五九頁參看



第五回、至聖 生神女の 庇護。

至聖なる 生神女はもはや 此世には 居られません。けれども
神靈的には この世の 敬虔なる ハリステアミンととも にし、
かつ 大衆のために 代求して 彼らを守護たまふといふこ
とは 至聖 生神女の いつはりなき 口から 臨終の際にも 昇
天の後にも 約束したまふた 所の 御言によつて、たしかに 信
ぜられます。されば 至聖生神女の 永眠後、人と 國との ために
あつき 御守護を たまはつた ことは 歴史上に 澤山の 事實が
ござります。が、茲には (我が國の 教會にも 祭る所の) 只もッ
とも 著しい 一例を 擧て 畢りましやう。

ハリストス、降生の後九百零三年の頃でした。グレチャ國のレオヒロソフといふ皇帝の時代に、グレチャはサラチンといふ外國人に攻られて國家が非常に危くなりました。そこで(其頃のグレチャの皇都なる)コンスタンテノポリの人民は大に心配して、神に祈禱したことは勿論、又特別に親切の守護者なる至聖生神女マリヤに願ふて、ウラヘルンといふ聖堂で、衆多のハリストミアニンがあつまつて公祈禱を献じました。この聖堂は即ち至聖なる生神女の名によつてたてられたものでした。所が多くの參詣者の中に、佯狂者と名けられたアンドレイといふ聖人がおいでになつてゐました。(この佯狂者といふのは、身はこの人間界に

すみながら、主のために非常の難行苦行して、靈魂の徳をつむ人で、たとへば身にはつゞれをきて、烈寒にも温袍をまとはず、足ははだして、食物もろくくあたりまへには食はず、勿論一の美味も口に入れず、人にはつかしめられあなどられて、晝は市中を徘徊し、夜は教會の椽の下などに寝て、只一心に祈禱と勤行を以て生活する人のことを申します。)佯狂者といふことはなく、凡人のできないこととことさらにせうと思ふても、とてもわたしらは三日とついきません。それをこの聖アンドレイは主のためによく忍耐してつとめられ、其たましひはよほど神に親近なつてゐた。貴いお方でした。故に神は大に彼を嘉して、此日祈禱

の中に彼と其弟子とに一のありがたいふしぎを見せて下されました。すなはち彼らは一心にこの都と全國の敵から救はれるやうに祈ッてゐましたが、ふと目をあげて上を見るとき高い圓天井の裏に、至聖なる生神女が衆々の天使と義人らに繞られてあらはれたまひ、其御手にはオモホルといふ肩衣をさへげて全地の救ひのためにいのりたまふ所を見ました。されば聖アンドレイは大に驚いて其弟子なる聖エビハニイに向ひ、「兄弟よ、汝は全世界の中保者を見るか」と問ひました。聖エビハニイはすぐ之に答へて『聖なる父よ、我はこれを見る、見て怖る』と申しました。それから段々と全都の人は此二人の聖人にあらは

れた至聖生神女の奇蹟のことをきいて大に勇みたち、兵は喜んで戦ひました。而してついにサラチン人を打破てこれを國外に逐拂ふことができました。これ全く至聖なる生神女の豊かなる救護によることでしたから、正教會はこの日(十月十四日)を以て彼女の庇護祭を行ふことを定めました。

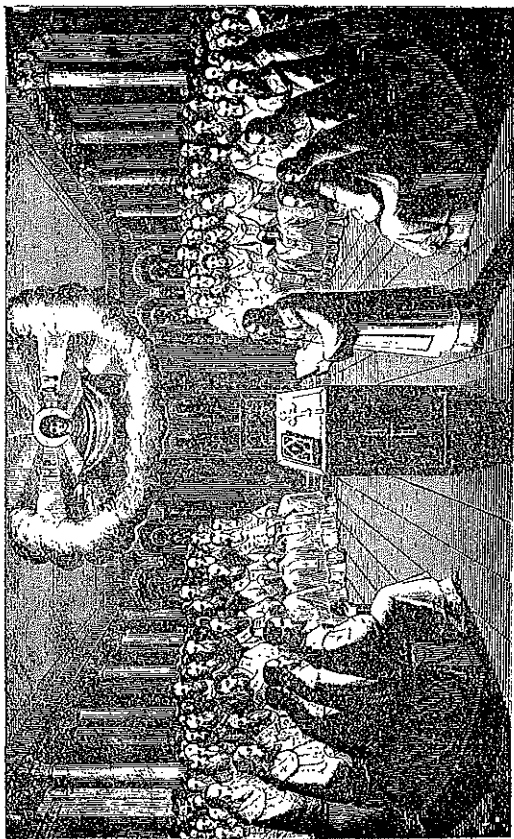
今我らは肉眼には光榮なる生神女を見ることができません、それは我らはかの至聖者を見るに堪へぬ罪人ですから。けれどもその至愛なる守護は目に見えずしてつねに我らの上にもあります。若も我らが熱心と淨心を以て彼女に頼み、其有力なる代求と庇蔭とに依ることを望むな

れば。
願くは我ら罪人も至聖なる生神女の庇蔭によつて彼女
を福ひなりと唱ふるの福ひを得んことを。アミン。

次の圖解は卷末(三九)に詳

三九

第三全地公會の圖



第六回、至聖 生神女の 容儀と 高德。

至聖 生神女が 雷に 外面の 容儀に 於て 無玷のみならず、殊に 内部の 無玷 すなはち 心靈の 善美な ことに 至つては 實に 驚くに 堪へたる 次第である。教會の 歴史家と 聖師父らは 異口同音に 其 盛徳を 讚美 證明して をります。我らは 今この 至聖 童女の 畧傳を 終るに 臨んで 彼女が 實に 内外一致た 殊に 道德上の 甚だ 高く 尊い お方であつたといふことの 傳へを 一原本から 抄て 加へましやう。先づ 至聖童女が 外形の 細かなところまで 行届いてゐたといふことから 古の 聖師父等の 證言を 擧ぐれば、教會の 歴史家 ニキホル

カルリストは、左の如くに申してをります。

『至聖童女の着物は、質素で少しも華奢な點が無かつた。御身丈は中背で、歩き様は、秩序正しく、目は涼しくて愛らしく、又嚴肅の狀であつた。兩親には殊にやさしく、柔順で、物の言ぶりはいと穩かであつた。

彼女のちゑは、神に治められ、只神にばかり向ふてをツた。彼女の意旨は、専ら望むべきことと愛すべきことにのみ向ひ、只悪と惡の根原を憎むのみであつた。彼女の思想は、悉く靈の利益のことにのみに向ふてをツた、決して餘計のことなく、悉くの靈に害あることから遠ざかつて居た。

彼女の目は、常に主に向ひ、永遠及び近づく可らざる光のことゝを觀じて居た。

其口は主をほめあげ、舌は神の光榮を論じ、神の(恩寵の)甘さをそぐ。彼女の心は、淨くして疵なし。

彼女は全く神の殿である、活る神の籬である。何となれば、ヘルビムの上に昇り、セラヒムの上に尙高く神と體合したまふたものであるから。』

次に聖アンブロシイの言には、左の如く申してあります。

『彼女は決して言數を多くいはなかつた。而して讀書家であり、勞働好であつた。言語は節制を主とした。彼女の尊ぶ

所は人では無く、すなはち己が思想の審判者たる神であつた。彼女の規則として守る所は、何人をも辱めず、凡てのものに善を望み、長者を敬ひ、同輩を凌かず、冗談をいはず、考へが健全で、徳を愛することであつた。彼女は何時いやな顔をして、兩親を辱めたことがあつたか。何時不和なことがあつたか。何時人に荒々しい相を現はしたことがあつたか。何時弱い者をいぢめ、無い者を助けなかつたことがあつたか。何時顔に荒々しい相を現はしたことがあつたか。その言には、すこしの不注意もなく、その行狀にはすこしの無作法もなく、舉措進退いとしとやかで、歩調は徐々に、聲は平靜に、一點の非難すべきところもない。

要するに彼女の容貌は潔白なたましひの表現である。

又前のニキホルカルリストが申してゐます。

『彼女は他人と談話するに禮儀を守り、みだりに笑はず、慌てず、怒らず。又彼女は飾繕ひなく天真爛漫である。而して少しも自分のことを念はず、もちろん佞弱ならず、全く謙遜である。着衣については、自然の色を以て満足した。今も彼れの頭に被つてゐた遺物は之を證してをる。約言すれば彼女の悉くの行爲には(神の)恩寵があらはれてをる。』

捧主者 聖イグナテイは、左の如くに申してゐます。

『童貞女神の母が、恩寵と衆徳に満てられてをることは

我らの知るところである。彼女は窘逐の時でも、わざはひの時でも、何時も喜ばしさにして居たと傳へられてをる。貧乏なときにも、難儀なときにも、怨みず。彼女に不敬を加へるものをたゞに怒らないのみならず、却てこれに善を行ふた。行儀はおだやかで、貧者に對しては隣み深くしてこれを助け、敬虔のことに ついては、人人を導いて凡ての善事ををしへた。殊に彼女は謙遜なものを愛した。それは彼女自らが謙遜者であつたからである。凡そ彼女を認めたものは、大にこれを讃頌した。彼女について、或人は我らに謂て、彼女の聖なる心事の中に天使の性と人の性がありくと合體してをると云

ふたことがある。』

終に、アレオパグの聖デオニシイは、自分が親り至聖童女に面接した時の感動を述て左の如くに申してゐます。『余がハリストス教に歸依してから三年、經てイエルサリムに於て、至聖童女マリヤを見た時、余は神からのやうな光り輝く童女の面前に導かれたとき、外からも内からも大にしてはかることのできない神の光が余を照らし、余が身邊には驚くべき芳しい香がみち溢れた。そこで余の弱い體も余の精神も、永遠なる福樂と光榮のかく大にゆたかなる徴と始めとを享けることができない程、我が心も、精神も、彼女の光榮と神の恩寵をう

けるにたへないやうであつた。余不當の者が其時仁慈に由ていふこともできない。幸福をうけたときのやうな其光榮よりも、尙他の光榮或は榮譽を想像することができぬ。これよりも上の幸福は、とても人間のちゑて考へることができぬ。かの神に光榮せられた人人の有様に於ても、とても想像することができぬ。』

之を要するに、至聖童女の萬造物の上に高き所以は、第一に神を愛し、御身は貞潔溫柔謙遜にして萬事主の聖旨と誠命にしたがひ、人人に善を施し、友を愛し、敵をも愛したまふ道徳上の完全にあります。

聖使徒は「太陽には一の光榮がある、月には別の光榮がある、星には又別の光榮がある」と申しましたが、至聖母は、御身一人にこの三つの光榮を兼て悉く所有てゐられます。何なれば彼女は太陽の如く選ばれ、月の如く善に、曉の明星の如く耀いて居るからである。

「二」彼女は潔き童貞女の榮冠を持ってをる、しかし他の悉くの童貞女の、榮冠よりも最も善き榮冠である。なぜなれば彼女は自分の潔白を以て諸天使よりもなほ上のものであるから。「三」彼女は結實よき女の榮冠を持ってをる、サラ、エリサベタ、其他の婦人のやうなみのりよき女の。しかし彼婦人どものより優つてをる。なぜなれば彼至聖童女から生れた者（即ち主イイス）は悉くの者より大なる者で

ある、そのとほり又彼女は、悉くの女より幸福が優つて
 をる(所謂「女の中爾は讚美」)。「三」彼女は致命者の榮冠を持てをる。
 なぜなれば十字架の前に立て心を劍に貫かれ、たましひ
 を以て悉くの致命者にまさる苦みを受けたからであ
 る。「四」彼女は預言者の榮冠を持てをる。なぜなれば今か
 ら萬世の人が彼女を讚美することを預言したからであ
 る。「五」彼女は福音者の榮冠を持てをる。なぜなれば彼女は
 人と成れる言の書籍である。「六」彼女は使徒の榮冠を持
 てをる。なぜなれば使徒等は自ら「我が主 イイスス ハリス
 トスを見たてはないかと言ふて誇るならば、たれか至聖
 なる母にまさりてそれよりも明かに彼れ(主イイスス)を見

た者がありましやうか。「七」彼女は表信者の榮冠を持てを
 る。なぜなれば堅く信仰を表して「我が心は主を大とし……
 能力ある者(主)は我の爲に大なる事を成せり」と宣言した
 からである。「八」彼女は謙遜者の榮冠をもつてをる。なぜ
 なれば自分のことについて「主はその婢の卑賤をかへ
 りみたまへり」と申されたからである。「九」彼女は克肖者
 の榮冠を持てをる。なぜなれば彼女の就寢は主の前に
 悉くの克肖者の死に優りてたふとくあつたからである。
 「十」彼女は持齋者の榮冠を持てをる。なぜなれば肉體を
 自分の精神によく服従たからである。「十一」彼女は矜恤者
 の榮冠を持てをる。なぜなれば聖なる教會は彼女を慈悲

の源として祈禱して曰ふ「憐みの門を我に開け」と。「十二」
 彼女は無慾者の榮冠を持ってをる。なぜなれば治療を施す
 に「たゞ受けてたゞ與へよ」といふ所の醫者を生んだ、
 その上自分もたゞて恩寵を願ふものに與へたからで
 ある。「十三」彼女は一切の聖人にまさる大なる榮冠をも
 つてをる。なぜなれば悉くの聖人は戰慄で、神の前に立
 てをるけれども、彼女は母として臆せず、勇みを以て
 立てをる、且つ母の祈禱は主宰をして仁慈に向はしむる
 に多くの力が有るからである。

願はくは我ら罪人も神の母の祈禱に依て、主イエスア
 リストスの義の冕及び生命の榮冠を得んことを、アミン。

前第八〇頁次の圖解

降生四百三十一年エヘスの生神女聖堂に於て第三全地公會が開かれた時、生
 神女が之を庇護し給ふ所です。議員たる主教は二百人以上集まりました。事
 は君府の大教長ネストロイが異端を唱へたに起る、其は「救主の二性を分ち、
 童貞女は只彼の人性を生みしのみなれば、之を生神女と稱ふるを得ず」と云ふ
 説でした。之が爲に教會は大に紊亂し、遂に右の全地公會に於てネストロイは
 黜けられ、救主二性合一の定理は確定せられました。是の異端辨斥に最も盡
 力したのはアレキサンドリヤの大教長キリルでした。時に生神女若くは神母
 の名稱も愈確定されました。

訂増

至聖 生神女の 畧傳 畢。

明治卅二年六月七日初版印刷
 同三十二年六月十八日同發行
 同三十三年十一月廿四日再版印刷
 同三十四年十二月四日同發行
 大正五年二月五日第三版印刷
 大正五年二月八日第三版發行

定價金拾五錢

著作兼
 發行者

東京府北豐島郡瀧野川町大字中
 里百六十三番地

水島行楊

印刷者

東京市神田區錦町一丁目十番地

神田則豐

印刷所

東京市神田區錦町一丁目十番地

神田活版所

發行所

正教會事務所

東京市神田區駿河臺東紅梅町六番地

電話本局二千五百六十九番